



東海談

全

5曾4
103



門 1 曾 5
號 103
卷

東海終上編

一 太平記以後醍醐天皇御謀叛と書し文盲なる者なり

一 箱根の権現に時宗の書翰あり世人為我の時宗と書と云い誤也小條時宗と書の手翰也文祚も為人おぼし見ゆとて為我の時宗と書していあまり無礼なる文也殊に為我の時宗の時致とかく伊豆の伊東氏と為我實に見えたり

一 伊勢物語の紀の五帝三代のみとていふまじりごと



不暇諸抄に淳和仁明文徳と三代なりと季吟と抄にも
志といえり是をな誤りなり紀五帝ハ仁明文徳清和の三
代は流る也清和天皇本紀と見れりくまむとと

一と玉は和歌のれと一とまよとよまよと福んきよくと
音よとよいふあ志

一伊勢系成系宮といふら一介と社系と系社といふ
一と社系とい何るぞ

一漢と頼武の北方とられ海上に放垂れりと蝦夷の地なり
委しくは章漢圖書編と見らり秋田侯は石原と又鷹

系氏の筑前産也頼武屋敷は秋田城地久保田と云ふ十余里に
しておとと不徳有徳と社と武希の廟と云傳法志人なり 小出はれ彼人

云くは秋田侯の内若より閑地有そぶやと云来りて
也りよまふ紀と錯い妄にいれそぶの正字と云るものなり

其且小祠有頼武の平生漢武帝とあり一と云傳
呼い一と思ふ昔は南部津輕具王化は承流は一と

志ぞと呼い一也頼武は且と放れて古々の天子と稱し
とあり一と後の好事人時代と考て祠と立一あり

一或人のいされ一六内裏の時と神祇官の今の二条の城地
よ有といり永和元年大嘗會記と見れ彼人といひ

はうくちりり大宇寮の今酒井讃岐侯の屋敷其地也

一 正徳中武城の口足門と云ふれり室町家も口足門と云ふれり室町家の
ふのこねのいよれなるものなりけり室町家の
口足門の殿中指家よりけり

一 玄園と云昔の寺は足利時代禪寺に玄妙が入り門と云
ふて立り也古の玄園の上席下座をきかしてありぬ
近頃の東越して皆忘るありり古老の吐也今池上本門
寺のぬれ古風跡りあり

一 肴の何真しとも肴料理なるを不又野菜よても作る酒

のむ時味ふきかのみを酒菜也今乃酒のさうかと云い
ふくあこれり物と云ふと肴と云殊に人小遣りみ出
肴ふと云い字義と云ふぬ也

一 謙倉実記の編末に令史別本と云書と引て出たるは
跡くもかきや云予令史別本と云い物と云と云りて
中根文奮と云い物と云一人我屋敷せりめりり
中根氏も是れ我と折り也

一 王人へ家にて服着る刀大小かといふは扱と云古き代
りの詞也

一 大和の人の名をふるといふと成らうと云ふ所かと云成る由
一 云々と云勿れ勿れ也伊勢の所をふやきても勿焼也
一 及第の礼は百年来とこれなり多々家々御曹司
とら元服して北野天神とて及第献策の礼あり昔朝
く臘羊と云ふ所の殊勝の事を見え侍り

一 いづらよて木の切竹の折あるとかふきと云成る記と
云かときと通されし物してきぬきといふあり中尾後
うふふふふふふのふ古記云ふに物りふ多くは物かとい
ふあり

一 吉野と芳社とありふれぬいり何人いふと
そやふく吉社と書しそよけ道

一 天竺よて水星と不くと云妙法集よ見こり

一 公方極と云二字園大曆及鎌倉年中の事ふとあり夫
より介の書よ出といふ及傳し其年竟義満云といふ
云初て足利基氏代と也明初よあり鎌倉よても
その中の事とせしありん

一 宮殿庵院軒寺堂是等とのと訓に家の名也其令
名と呼ばぬ礼ありそ居るとさして云陛下殿下閣

下の数みつ

一 糸帯より後原道長公と号して殿といひりとのと号す
 是一人に限りてのる之御堂殿と云い堂云也堂といひ殿と
 いふぬらうは是より略し誤りて徳大寺殿法性寺殿の
 と重云と云鎌倉殿いふ最明寺殿いふ一史記殿と
 云くく最明殿と云一室町殿いふ扇号とも麻苑院
 慈照院林と云院と云との字有麻苑院殿慈照院殿と
 重云云いと括あまのさ(其)如(其)書てやう側
 をつり殊に何院でん共あんと人のと号よふ詠文盲

也是もとろく殿いふくは慈照殿麻苑殿と云いり畢竟
 殿といふに記すと斗りんはて文院寺と号とのあること
 知し今官府に世状何れ誰何誰老と書て院号
 ある医生といはれ何れ何院と云い何院殿何院老何院
 板といはるる院字といふんと附るもの也水産
 封内にある寺の位牌に院殿殿と字と書けつり
 西ふとらけくむらる誠世稀女賢人の如

一 世俗通用し書簡に起し一筆致書し外と書りて
 長元和の以迄は見あり侍に實承の以より初りて

や女子の一字と書出する古き文字適にこれ有
一女子の文字のむらさぎのりいぬりせりふり
るいぬり也

一 道書し字義神書仏書律令官府し字義俗流し字
義詩家文章家奇書字義各々字義かりり未練
し学者はあはるるをたしに況や文字し亭方及と云る
有をもわさゆいひまし字義と彼出よあてかひ彼出
とけまにわてふ林希逸老子列子莊子あり字義と先
王し書し字義と解在若模糊して通せは唐より未

一 練し学者あはれいけふはあるをさるる

一 物し形容し形容するを恰好と云恰好と云る之を恰好
うと云ふ也

一 換極し風京日よりいひ好し字也能く字し字義
格別しすなりけり人能く字多く用いそこれよ
一 ちりい下夜し云水する之のあといま云也

一 日本紀神功紀三韓征伐し所なりあれ川し地名を是
朝鮮の鴨緑江也和訓と割る時アツのアと取りり
のりとりてありとふあれはのり也朝鮮よ川し

事とされとふ物にはありあれとて誤る事とありあれ
かといふは是又重んずるにや

一ある國の守京近と別と同終と側人先武務相換伊豆駿河
と云て卷(の)子て君よりが奉りし武相豆駿を別

際冬尾解に雁路中と卷て座中終る君も一入兵系
貴一玉ふ是は文穆公の詩也文穆公は林春斎溢也今時の人書とみる

る少き也(世用)なるもの多し
一旗は文字とかく乳と我た方よりて書

一礼記趨而不走と云吾邦めては讀むる趨は少く是をや

子走ハ一系かけおとる之安人の筋靜は仍は是礼也又その
事しやうかけおとるは是礼也少く是よく歩ると
ある

一待亦管絃と文字と待くくえんとよむくし志あ

く見んとよむくしと明經道は讀分と志し礼ハ
よむるは儒書と有とも我必し讀分と讀ハ一博

士とえうせと讀ハ一唐音とて讀ハ格別致して國音ハ
連声と云る有上の字の音とつて下下の字にこる多し

稿もさうよてあれと日な稿といはむしなる音とのん

よてかかれと親音といひのしよなる文字一と云ふは唐土
 のも也唐土よの連声といふと云ふは史記に声明する其外
 天竺阿蘭陀鞋靴朝鮮も皆我皇と同く連声ある也
 一日本記と編述し合人親王と云と祢り親王と云と云やと
 の親王と云と云或い及ひと親王と讀或う及ひと親王と云
 我いかく傳授と云け家かみく口説と云といひ 伊勢かてはたと
 云む書は何と
 志むとののくくもまうるこそおのくられ親王の在存生く時かく
 程くもやうあるまうとかく親王再生はなれあるまうは是
 可といふも志れするまうか 嵯峨天皇の皇子万多親王和

訓うつたれ祢いやとり音よと云むもあう

- 一 武子内親王のりこ内親王と讀し何子とあつくるる女
 中々爵也嵯峨天皇の皇女有智子あり祢朝の婦人政子有
- 一 金時徳定光季武等古一の雜玄にて光光と信よあ
 らぬ光光と部下く役人にて京師に口方と云けたり
 て兵杖と帯し非者といふし先巡檢せしとの也 今昔物語
 抄巻五光
- 一 武士の威勢のたそろくくならしは八幡太師といふなり也延昌

ヒホアヤリ
 ヨミカクシ他
 本ラエは使
 三スヘ

く帛黨りて有る平定道平季武の字云時と云三人ありたる三田源二源宛
 井氏氏評曰武亮等はは白男内合人源二源父一説酒田時准井定光浦且又号ト詔
 季竹未知何按

もそろく不ろくにもいれり也今昔物語など小見ゆれその
終り終り終り成就せりと見え

一 けりし礼樂刑政定續日不記すも今の日本紀に
續た續紀と後人の希也續紀とすまされ文武天皇の難有
御代に風俗忘れぬ也今日も衣冠礼樂皆御代に記す
年月久しとれり万民日とて用て去りし

一 侍家も佛法も松樹と用せたり松木といつらるる梅樹と用せたり
梅も木といつらるる松も木も及樹と及りて用捨有るは
のどく也一て是も限るは一字の義理文章家と大遠ひ

有と之應と字と侍家にては大かか有ととふるも用
侍令家にては尚の字の意も用也一編と泥む書教も侍ら
ぬ也草木草樹山木山樹といふは

一 不濫と十字と湯ととよとと十字といふの慢心事也
一 我朝も三忠の大伴金村守屋大連和守清磨也後世も三
忠の重盛及房正成也其中に金村の欲るとく首尾
とこのふちを智恵不足清磨の千辛万苦ととくせり
我朝も今の清磨ととく知るとのあし是も次ては正成
一 純粹多く君とよとのふれり古今稀成人也嗚呼世の人

事なき時ふんといふ事有て後やうやく志耶律楚村
君とれとして良居たりしは忠居たりしものなるれといと
あかしのまゝなうしや英狄の人もの信言有るよとそ
ろよ涙とともよ一ぬ

一 頼朝の事氏信長秀吉の方陪し智恵多人も先例なき事と
ふ一をわよ初めたり

一 青苔諷衣掛岩肩白雲似帯廻山腰と云侍いふ掛さとのなり
江後抄と白雲似帯圍山腰青苔
如衣負巖背都在仲ノ作 白樂天下初る者もてものきたなき
るはふ由しされいこそ江後抄とされい都在仲侍なりこれ衣

きたる忠誠は乃ちうけて衣きぬ山の帯成さるうかと云ふも左
伴紙一也 若衣きたるいふは由るけむ按
又二後世に信ふとか政たるものなり さぬ山の帯と云ふは左

一 文子と老子と引て曰人生れて静あり天の性也 揚休庵文集文子
引老子曰人生而静
ナル天の性也感物而動性ノ欲ト漢儒取テ入礼記遂為經矣若知其出於老子宋儒
心曲ヲ為譏評但知其出於經則護ス 揚休庵文集卷五十一

物に感して動は性の欲也と文子の老子の文子也漢儒は語と
とつて礼記に載し成朱子不吟味して詩經の序に引用れ
たり若又文子を出て老子の欲也と知し偏定地なる宋儒よま
用ひられし礼記にあれは玉言なりと思ふて用ひられはたし
一 明徳は同金とあるは馬運上のも也但徳の祐子いり

逆祥謂此說不是
蓋亦可謂不知君
子之心者

一 不比等と世の学者文字の通りフビト訓ハフビトの
 字とつめてフビト一ぬい入文人也史の字とよむいフビト
 一 大に匡房とサフサトフビト貝原氏ハ夕フサトフビトといれ
 総れハ匡房の自作の假名書ハ通フビトと書給りフビト
 夕フサトフビトハ大に匡フビト勸フビトと夕ヒラトフビト通
 一 冠韻傍禮ハ文章ハ法度フビトハ文字の位並とあやまり顛
 倒多き事あけてフビトハ人見氏ハ序とフビトかかれフビト
 小そや人フビトのまれて序と書フビトハ編中とて文字顛倒
 なきやいフビトとせんフビト其書の義理と文章のフビト

論をうフビトハ只唐人の足てもよく作者のフビト通りフビト
 序と辭退フビト可也和漢三才フビト會フビト
 空室フビトハ書フビトハ寺治良安フビト手前フビトのフビト等フビトとフビト一フビトハ
 文字悉く顛倒ありフビトハ序と書フビトハ序者フビトハ意フビトハ
 一フビトハ

一 或は若世の名人と問答曰儒者ハ 伊波源亮
東涯 長胤又号横斎
祖徠物茂卿号護園ト甲侯ノ書記 中根璋伯理
萩生教齋 曆算ハ 中根文齋 久為治在內殊廣子
 文齋ハ曆算のフビトハ多フビトハ筆フビトハ細井次郎大夫
 官位装束ハ壺井安元名ハ神尾ハ加茂の利本木氏能譜

ハ松木次郎在郷くくりて戲臺往々市川卷十席号文年
鳴云荒井筑後昌和漢の文字ヲ達せり詩に其意出ルナシ
今已ニ物故し玉ハ今ノ代ハ詩人ハ桂川三席在郷ナリ

一尾州春日部郡小田庄清洲本町山王ノ社此古木の根より
黄金九枚中九枚切金六十枚社所ノ云氏河原村十席
と云者堀出ルぬ實ノ享保丙午四月十日ノ事今ノ黄
金より大也古は是と少く切とりはよりてかけをひしや
神主丹羽外記是と尾炭ヲ存る東都ノ事より云はれし由
合古代の跡也として八幡宮ノ一枚羊飼外ノ事云云
想目録今ノ金子ヲ五幣被堀出ル云云氏ノ事と云

一今の手紙所状ハ云々及以凡年号干支と書ハ云々の
皆干支と甲子如形分往しとくにする事ハ云々
未詳ノ学者ハ書物の序跋と書しと云はすや
見ハ傳之云々甲子乙丑と云ハ書ハ云々の是ハ昔記録
事よりあやまり集れり記録ハ日次ノ事ハ干支
と云ハて云々云々ハ云ハ紙ヲ枚ヲ出ル事ハ往ノ事
ハ云ハ道ノ事ハ云ハ云々の事遠政ノ事ハ享保十
元ノ事ハ字ノ事ハ云々又年と歳と云ハて
居る者有歳夏代曰歳祀殷代年周代載唐代

一享保十八年七月上旬より東都大疫癘はやり上下貴族
皆いきなり中りて病臥十三日十四日の以ハ大路の性来と
多し也是醫書にいはる天引時疫と云もの邑里た
り藁より夜神の敵と化りけり太鼓となりて是と送
り南海一流ぬ官もやうしてと云はれ是戲なりとい
とも又三代の遺風やと思ふ

一在々との左々人かき云いり五々一系り外左々性とい
何云そや維章知時ある歴々武人のいとい身たとい
一若二三卒往五謙念子孫在外といはれ大なる儀ありや

一樂の太平樂ラッ立常樂ラッ木のらくかぐの音なりと

疑付しゆ一り樂と云これ大宰紙先生とい々と問はれハ

温公通鑑百五十二卷十六葉表梁武帝記爾朱榮日暮罷歸于左右連
手足地唱回波樂而出胡三省註此所謂蹋歌也回波樂曲名樂音洛

彼先生ぬる太平樂又常樂と唱ふまゝらくの者
子ややらの主政おとろて礼樂をこれ承人文盲成り
知らくとあやまの唱ふといをれ予つら疑の付と
いよく修りありしは後系於子性し時東涯翁
門人土亭夏回熱日席よりく信とれ熱日席いられ
い否たよよ有ま一陽らくの音とて一通鑑

の梁武記よりくの名に〜と梁武記と云われ、
朱榮回波と奏〜て出と云下く胡三省の注に樂音
洛と有ぬ〜則樂が〜唱する〜くの名に
〜るもの論なりとく師通よりその字同の校ぬ
〜れは漢山子書と〜も志〜

一枚の六五文の爲了錯簡脱字誤字甚多〜
不記の二入錯簡爲了多〜文徑實錄も二百字程不足
の和あり二代實錄の一向略不成〜字とぬむ人の校
合して用の〜

一 壺碑と靺鞨必らるの肅慎必〜て今の朝鮮と一の字
〜也昔靺鞨奥及び着〜由國史よこの肅慎の
い〜見〜せと例ある是也古書に如は仮名と付
アハミノ実名也アノ字と似たるあり〜とせと例ある
あ〜

一 今官府城下の町〜よみ人組と立り古き校也大正年中
〜令よ〜

東海後上編終

東海談卷之下

一 諸源の西海、諸平と征伐せし時二位、尼天皇と抱き奉り、
他國聖と号して入水せし女心と謂つべし、いふ女よれ、逆
最にえり、今女、却てぬけ、抱き、敢すま、天皇
と云ふ、云極く謂れと云れ、いなり

一 明、辨水我玉と文を觀て曰見本、日平人、被く字、用
ふと知し、いと是、子由て之を觀れ、實、辨水、言のか、
譬、い、爲何所何と書、い、い、い、爲何被何とす、い、い、
誤、い、爲何と被、い、同、字、い、い、爲とら、い、と、訓、被、と

ぬめと削りても義理の通ずる也為の字と並ぶる所の字
見し字と用ゆりて世に大儒先生多く誤り来れり仁齋は
生し所謂妄填と云るに謂はるる

一 けりし文人云々の二字と下はるるを知りし東鑑職原等、
妄りに云々の二字と書しと視れし胸あしくなりて死
痛と云ひし二書のものと非は王海中右記園大曆等、
皆然り延元年中文章御裏へて保えよとて壞死極
一人ぬ

一 歌は武物狂の心と和ひりて北条氏の刑と緩くせし
思はる非は天朝の背りし何れ一首の歌復恨
たかひ大事し歌と省ひる武士を知らるる也
はる非その大和と共大事

一人呵られぬ死し笑れぬとて死し負あとして死し鞆
の中りぬとて死し難人の子掛しりりとして死し色
溺れて死し是等の身と殺て仁と成と只るやい様
命は惜みし思ひざる不借日かたれしなり日か徒来
のふも非は源平の戦死をたると子柄とひる僻夜
一やひるる君父の爲し命と惜む者多し六百奉

来りたりとてありし風俗はれ、其奈風令子残る
風雅の字象の地と掃ふ是とて考ふ平高時、源
義貞が攻られて一族一同に自殺せしは又日心なり
のら場と通れて時と訪、中華の人を別つるを性急
なる日心人の従容ある字象の象も知るぬ古の死の
と功ありて破れざる必象と手前より破りし十月八九
日あり

一 今人苦人と云ふ知しに只世も人も背き一向後生を
教ひ一心不乱に備経念仏に彼方に向て居座れと云ふ

逆様謂末儒善ノ字ヲ
解し損じテ教國マニテ
文盲ニテシタソトハ何ニ
因テ然イハルヤ其説
ヲ詳ニキカマホシ

終日那辺向て居る積な穀漬と昔人と只り年竟末
儒者ノ字と解し損て我々近文盲なりたり夫昔人
云ふ古の措て倫せし平泰時補正成等とて昔人と
云ふれ若向とて強倫とて泰時と猶取し以れしと云ふ本
に天地昔人と謂ふ一昔者或人々有

一 弱浦、湖満、水れ、か、は、か、り、一、我措て回鶴鳴る
か、は、浮、り、て、干、浮、也、と、助、字、也、み、ハ、閑、と、き、纏、と、世、の
各、字、也、湖、満、水、れ、存、干、浮、と、く、の、其、故、回、鶴、鳴、る、所、に
く、葉、田、と、方、も、也、是、と、斤、男、波、と、云、い、甚、し、き、俱、也、紀、也

一人も異口同音に訛言の多し萬葉集試みく見れぬけ
誤りなきるるれた歌徒人も万葉集と妄指及皆及実
と夫よのそ多き

一播磨のあしと古昔赤石と書くる事史記本姓に見
あり最風雅なる地名也是と後世明石と書改る事亦最
至風雅なる事なりと云

一積鼻禪となふさまと云順和名よりあり今も上鑑に人
いふ云也是と云れ田舎者昔言に強也梨花地と
次子酒く拙くなりとておくぞ

神代卷重潮翁
語類白クサキハ
マツサギノ上界也

一紀貫之の去依日記小部門にシリタノ繩緇ノ以ヒラキ
糸と物れい昔の糸分ちぬ緇の以と用いぬや海緇
以と用い何れの時を忘れぬ今江戸に人が了と云
或いすば一里と云

一法皇号の伝承していふと佳名と名ふはれ天下に上
万民に長なるもこれの佳名も非に殊に方制に
鏡と法皇と号せり古遂に皇と御名と云る院号に記
崩と胎むと云つて唯冀に大上天皇仙洞杯と云
那城の愛多き佳名と云

一 論語註、何晏集解皇侃疏等と用ふるも明徳に
 故實として天朝として今も是と用ふ也 予 京師に遊學
 せし時藤原の韶光卿勅當小路邂逅せり座上に皇侃の
 住せし論語あり予皇侃と文字に従てりつと流れ
 卿曰わづらんと流る勿れとつと流るを明徳家の
 故實なれ 逢坂山東と園東と云箱根山東と
山東と云同席して口後あり 山東の學者は
 先流法と勸學の天皇としてん乃と流む推てゑり
 一 地歌と云字漢書よんあり 漢書按圖書觀地歌
 一 駟馬の家、不特雞豚之息伐氷の家、不特牛羊之人

韓詩外傳よ見たり是より由て見れ、大學と云書よ
 しくんと留て着る仁齋先生は大學の孔氏に遺書よ
 非と云れ、ハ又百年來に活眼也書と云るハ活眼と
 以て着る死眼と以て見るも勿れ其明徳と云い定か
 といふ如く本文と朱注と相違せらるる氷炭相容
 ざる似あり東涯先生明徳朱注を載す熙朝文苑
 あり請つ繕てよく着るや
 一 稱唯と云えやうと流と考定と云えやうと云る賑給と
 志んかうと云る明徳道と故實あり

一東都室直光儒あり清肥後侯且侍と賦せられと

和せり其類云奉和肥後侯拾遺大牧伯高韻と書

れ多り呼はは何と云ふそ先とくとんとめて着肥

後侯と云ハ一玉王より拾遺官人なり拾遺侍從也

マタ僧玄光梅洞林子より水戸侯招ふ志して侍ヲ賦ス遊水戸侯ノ園唐名ニテ官人也

池ニト書タル能事賦ヲ知ルト云ツヘシ今ノ儒者ハ玄光ノ及サルコト豈イリマシカラヌヤ

牧ハ列牧伯ハ五等ノ諸侯ノ爵ナリト云ハズ人

と云フ混して書れハ何ぞモ也侯多ク人拾遺牧伯

と附てハ侯多ク人ノ面目なきもの非ハヤ又大ノ字と

妄り用ふるもの云ハれと學ハざるハ信ナリ僧鳳潭萬

坐堂菓園ノ跋大技桑と書ある笑ハき甚き

也仏才大阿羅漢大弟子等ハ大ノ字も妄リ其石

と張皇せんとして大ノ字義と妄なるなり太宰純

著せらる修刑阿弥陀經ノ凡例ニ詳ニ論せると見つハ大

技桑と書進るる後ハ小技桑と云ふなりハ也但日本紀

大日本と書しハ倣ハヤ薩山源七ガ朱明一統志ハ跋大

本ナキハ大技桑似多ク笑ふ也大唐大明亦ハ大ハ

大小ハ大ニ非ハ何と云ハレハ小唐小明ハ多クハ大

大弱ハ大ニ同ハ水戸侯ハ日本史ハハ三字ニて又

上もりる佳号なる大日本ト額せらる及至風雅なる名
 とせられり定て日本紀大日本ト成證とて其上
 大唐文明ノ例ト見へあれと正しく大和皇ト云く其風
 雅なる必名なれ或老儒ノ曰大ノ字と必名冠する
 我日本ノ手括りり及朝鮮とて大朝鮮と書るハ
 禁制りり中必のゆるさる所也豈東方ノ光非をや
 予答曰天地ノ間万国ノ中獨立し必と建て中必ノ臣
 たりさるハ万必ノ志の所なり我子万必ノ向て聽し
 ざる外必ノ拘ハ卑劣心ありや唯頼ノ所ヲ稱呼し

雅なるに従い何を必しも大月氏ノ名と學んや
 幸大和皇和ノ名目あり大日本と云勝る也や
 一源氏物語ノ每百廿四卷中院巴足軒と源ノ後考
 五人ノて編し事也初け事と造就せし建書籍と
 多く集し一句一言世物語ノ因涉するといそノ後草
 せし昂世のハハ浪江入楚四卷なり此れハ入楚ハ
 舟と編し為して草稿なると每ハ藏れて世のハ
 世子出ハる安入楚ハ多く人間ヨリナカ流れハ浪江入楚
 ハ本名濫觴每底抄ト名くけ二ツノ名ハ孔子家語ト出

浪江始出於浪山其源
 少水可以濫觴及楚
 國滄波五項非舟船
 不可以涉也見于家
 語矣又山谷句云浪
 江始濫觴入楚即無
 底

多れ大巴足軒山谷、泯江本温觴入楚、各底云
侍て名けられ、中院姓、藤原名、通勝、云藤
孝、細川幽斎也、丹後、田辺、城、看られ、時、り
通勝、云、け、時、天譴、と、兼、て、田、邊、蟄、居、の、り、凡
十九年、其、後、再、い、徴、し、時、天、皇、御、別、衣、侍、と、賜、ふ
通勝、の、芳、韻、と、和、し、奉、る、載、チ、一、人、一、詩、と、あり

一 紙屋川、北野菅廟、後、流、る、溝、也、俗、間、是、と、か
い、川、ト、云、り、ん、や、川、と、傳、り、云、也、昔、仁、和、川、と、縮、紙、ト、云、
綸、旨、等、ヲ、書、り、紙、と、云、を、出、し、紙、屋、川、ト、云、鈴、虫、

卷源氏、紙と字、玉、小、原、の、人、と、め、し、
と、に、作、と、あり、て、あ、ら、と、ま、き、よ、う、う、ふ、す、の、勢、玉、
と、云、る、是、の、り、紙、屋、と、り、ん、屋、と、云、六、帖、と、歌、子

かりにて、も、糸、と、れ、と、い、り、ん、や、川、
紙、の、千、鳥、の、と、と、れ、と、云、く

古今集、物名、部、

う、え、玉、の、つ、く、紙、と、云、り、ん、
か、み、の、紙、と、云、れ、と、云、く

是、ハ、紀、貫、之、賦、と、歌、の、り、季、吟、老、人、
次、峯、經、詳、

ツキ子

見あり

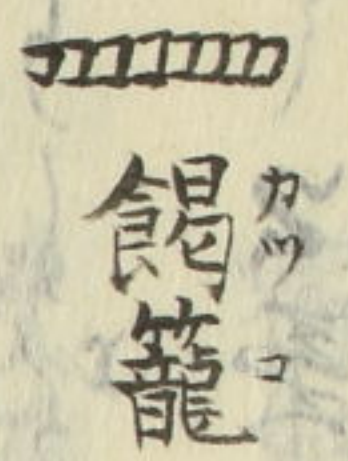
宿紙の本熟帛より熟く字と清て流るるなり
史石宿ノ字と用也宿ノ字ノ音と假るるなり
安名ノ非也

次峯後ノ三字ハ舊事記ニ見あり世之ハ
山と紙亦彼山ノ後也北村季吟山城ノ名所
と事集て次峯後と名つたれ全初ニ卷
あり凡山城ノ地里ノ書ハ里川道祐ノ雍州
府志 卷野ノ宮殿山城名勝志三十卷秋氏

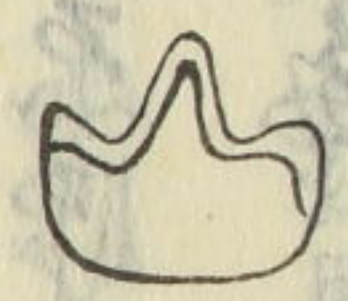
某著せる山城名流志二十卷岡祖衡著せる
山城志以上皆平安城名所と詳載あれども
次峯後ノ詳ハ志ノ古と好ハ君子ハ次峯後と
流るるあり

一昔ノ干菓子ハ江家次第ニ見あり砂糖ハ後世流るる物
ハ今ノ如く味ハ甘くすりすりノ味ハ只糯米麦粉ノ類
製りしハ今ノ京師ノ漬物内膳ハ世々之と司りて禁
裏ノ公事有ハ毎ニ是と製りしハ七百年来其製
と遠ノ内膳ノ名て彼内膳ハ今ノ菓子ノ形本て別

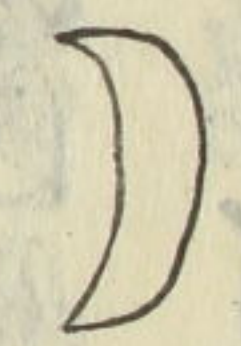
獲せしと津村氏に贈りし字を事左に如し



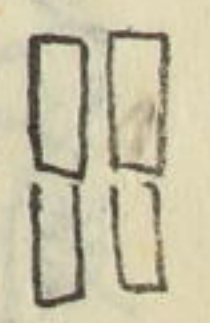
加久籠



加久



加久



加久

右に種々名目江家次第に見あり板中加久繩と加文繩と誤りまり文ノ字と久ノ字を改むし

一上加員茂神社の瓊々杵を祀り下加茂神社の神武帝と祠は是社家深秘なりと山海赤巻の改元考寺ありてより世々人老と知る事を得ぬ之神社考神社便覽和爾雅諸社一覽亦其説を用ひしに

一細幸竹の子とすくと云古今著聞集石泉法印鞍馬別當より彼よりすと多くとまうけられぬと或人許を以て賦る

けむらぬくゆの福少く小石

これいとしてまうむくてもい建家

一ありて小説の鈴木十之氏武内高の事と云後参考をてし然れども十分解し敢て人多く先と必定察しる也

一ありてと云書の赤城翁茗信なり未疎く学者に假

一字外題と嫌ふて可成後と改め付サシ、或は文盲ウツの
学者とふと其誤面と見ゆく、且つり奈流田志と書
たるは文盲せんんん、僻るは外ウツなり、京ウツの遠
く江戸へもをり、遠を別あり、荏苒ウツを羊途と学
者、勤それかゝる得り多め、二十葉の内、二十巻も書と
流祿が何るも致し、まもの也、其先入致し、一生の病と、おそ
か、圓機活法と赤城翁や服元喬の、大俗書なり、視るる
ふれと云ふ、たり、其の驚破益、書り、とて俄、拂
物、ある疑下本、を疑、根根也、昂た、り、これい、り、未、能、

学者の外題とめりて、諸学大成と改書、床ウツより
臨し、垂て、ホツホツ材本と引、其の学者も、あり、かゝ
一、枕心ウツ、一生ウツ、枕ウツ、い、れ、い、せ、ぬ、もの、也、但、来、翁、い、れ
し、如何、服氏、云、い、如何、ト、其、れ、の、所以、と、云、せ、ぬ
し、我、可、笑、れ、底、倒、れ、書、と、多、く、流、さ、る、在、故、の、こ
一、秀、吟、翁、曰、或、從、暗、部、山、鞍、馬、一、名、也、又、或、從、鞍
馬、心、續、と、を、源、氏、弱、紫、卷、こ、ら、る、魚、の、山、子、や、と、り
もと、免、満、不、志、と、あり、くら、那、の、ぬ、字、清、濁、と、あ
音、あり、世、源、氏、と、辞、又、い、古今、集、と、

梅花不月ふるうくく山やまに破れと
志^かすそむる

け^は字清て流なり

我意ハ晴^晴の山は月とまき中あくも

教ハ海さ

け^は款で^は字濁^れ一續嶺^嶺經^經より
續嶺次峯
和訓同

一近世諸家^諸の婚^婚礼^礼の納^納菜^菜昆^昆布^布と懇^懇婦^婦と云^云柳^柳信^信と
屋^屋内^内在^在多^多尚^尚と^と綢^綢と^と多^多后^后と^とり^り敷^敷甚^甚い^いれ^れり^り殊^殊
備^備り^り最^最拙^拙く^くと^とや^やり^り唯^唯質^質素^素と^と平^平假^假名^名と

事^事昂^昂好^好く^くる^る拙^拙キ^キり^り浅^浅見^見ハ^ハ皆^皆中^中等^等ノ^ノ学^学者^者
中^中多^多ク^ク上^上等^等ノ^ノ人^人ハ^ハ方^方子^子ノ^ノ可^可否^否と^と知^知り^りな^なら^らず^ず
ハ^ハ世^世に^に下^下等^等ノ^ノ人^人ハ^ハ可^可否^否と^と知^知ら^らぬ^ぬ故^故に^に誤^誤り^りハ^ハ多^多ク^ク
なり^{なり}但^但中^中庸^庸ノ^ノ人^人ハ^ハ物^物志^志り^り立^立て^て大^大ニ^ニ風^風教^教ノ^ノ害^害と
ある^{ある}事^事拙^拙し^し積^積む^む拙^拙キ^キる^るに^に死^死り^りハ^ハ水^水清^清ト^ト也^也と^と出^出る^る
け^け人^人室^室町^町家^家ノ^ノ礼^礼儀^儀と^と知^知り^り又^又尚^尚時^時ノ^ノ法^法式^式ニ^ニ通^通せ^せり^り其^其
業^業明^明ト^ト任^任て^て種^種々^々ノ^ノ礼^礼法^法と^と改^改し^し事^事多^多ク^ク早^早竟^竟と^とあ^ある^る
ぬ^ぬ事^事ハ^ハ人^人也^也ハ^ハ是^是積^積む^む事^事ノ^ノ煩^煩ト^ト也^也期^期人^人ノ^ノ事^事ト^トも^も
期^期不^不能^能アリ

戦国ノ疾トハ何レノ國
カシテハ不審モト云
至ノ度ノ支損ナリカ

致祥謂聞齋池儒者
之對未失當夫脩身
齊家治國平天下者
儒者之事業也天下
事物之多至瑣細之
事豈得盡知之焉
固守之言欲使儒者
為守書之用而已亦
可謂尊梓匠輪鑿
輕為仁義者

一 我々も疾かつのこく正字と尋ねられし近き
人刻しけり伊友源依り門人某と技持して
重れし尋ねられし種利口のこく正字のこく
外に活みりて時ある渴按かつのこ青菓子也
作棘籜誤矣 圖齋
と儒者と養ひ重れし問ふに私子に知りて書小学
近思錄朱子集語類性理大全に眼とすし且又
静座工夫暇しく外にかつのこく正字杯頭細く事存
せしとや一ぬ守聞て曰まこと儒者と云もの用
よまぬものか世よく費多かる中儒者と稱とや不と

費いなるありと笑しにむなる也凡学者は
法に神書も私書も歌書物後怪終に数近法山後入
用次第は五出のそ好まらざるに書み経
有か多きとて史のかりと知て世間用はまものか細
川幽齋の学問は多きを食袋に積まざる可
るも不可るも一ツ入して重て入用と随て使ふと云
予は言は遊人彼二人は儒者一生暇く用はま飽也
食ひ暖衣は儒々々として素餐と樂先り素餐
と翻譯してゴソツブト云へ

一茶ノ初昔後昔と云各有り是ハ二月ノ節ノ入テ廿日メ
茶と摘昔ノ字と介ハ廿日と云ル其以後ニ摘と後昔と
云トモ喫茶礼ノ書ニ州人木と名ル茶ノ字と云ル也

按或人ノ説ニ世ニ傳ニ俗款あり其款ニ云

むろと久と云ル也ヨク見ヒ一ノヨク見レ廿日

一伊勢物語ノ春日の里と云ル也符一往イハレリ

け物語ノ作者知ノ字義と知ル者ナラズ中華ノ書
知袁州知漳州等ノ知ノ字ハつと云ルと讀也知所
ホシ知ト云ルト云ル也非ハつと云ルト云ル也業平公

用ニテ春日里と知レハ一日二日トモ二年二年
トモ其ノ同ノ事ナリ百年来武人ノ封セラ
ル代ト知リ所ト云ハ業平時代ノ合ズル事ナリ貝原
久壽ノ著セ一京都廻ト云テモ其得ト兼ラレ
一トモ伏見ノ名不ト書一後ニ彼ノ世近ハ京尹ノ知
所ナリト知ノ字成志ト讀レ一ト後世ト標トシテ
兼世ト視テ得ル事ノ多カレ是章ガ私言ニ非ハ彼
歳但来翁見一ト時勢一ノ口讀トモ知ノ字ト必シ字
ノ義成授リ一必シ字ト毎ハ章ガ著セ一和學毎ハ

洋論にたれけし書に漏れぬ利口知る二字と志
とどころふと讀てもつらさとりとこふと後とも同
るひかりと云それの文ひる得也文字は傍及と云るひ
と志とそれの一生学んて耳味知るひるは或は華
傍に仏經と讀くと傍に看て聽ひつらし出入二字と
すいぬると讀て故章以為け傍に必定讀や中なるひりて
出と去ととひつらんと其經と取て音にこれ入声
讀て所也出と字去声ひれいづつと入声ひれい
いつらととむ何れと下と文義と吟味してよむる外と

借るぬれに彼傍曰志のつぬらうとと難きをすいぬ
と讀と云一是又志と字と志と讀てもつらさとりと
讀ても同る志やと云未諫る学者と同日に讀や
まや

一菓子と菓の艸冠ひるをその正字ひれ本草に果は作ら
因果と果と誤り解しえとす云訓と志て菓は作ら

ひるえ

渡辺

一斯波と三田と源二綱に住せし地也と云其初に八幡宮と
徳守神と云ひたる誤り也徳に住せし地は箕田と云所

とて熊谷と云ふに同じあり其所箕田八幡と祠在り
六孫王姫基箕田居られし事史よりたり此れ
箕田と源二徳も姫基も祖先と属せし事なり

一本田善光上人の開闢以来未だ生ぜざる人なる何もの
一 校児の寓言せるや善光寺と因てヨシヨシと設けヨシヨシ
と名を因て善光寺と設け浮屠成り世を欺く毎
れと多く殊更今其境因善光史婦の像と設
けて錢をつむ手取とせり此れ其文盲人の傳
事これ時代の人と名を付板成知れけ時代よりの名

は村さりて猿樂の音曲も古人と稱し使ふに狂言と云
各目あれは吳論や天地未だ生ざる人と傳り此れ其
尤道に罪最ふ依野源左衛門と云人も寓言する
と知人なり和漢三才圖會下野州大平権現の依野源
左衛門と稱すはなれは最早実在する人と思われは
のり多かれは後世の人流古見る事難う免

一 足利学校は小野篁と曰師尊てける胡礼と思ひ
四 文徳天皇實錄と繕て篁と傳と考す陸奥も
任せられし事見えは但古も幾七道と諸州及び

多稱爲近学校なり。子詳必史、見たり此れハ
足利必府と云ハ官府也。非ハ又筆讀書也也
と云實ハ澄按ニシテ此れハ分類年代記足利
義兼義康ノ子北条時政
女ヲ娶リテ義兼生リ嘗ニ叙学校於足利納自中華所
来先聖十哲画像祭器經籍等世稱曰足利学校
其後經一百余年而災源尊氏出奔西海與菊地戰
于多々良濱時默禱孔廟遂得勝矣於是再造聖廟
以崇奉之以先祖之所叙世々不絶祭祀按ハ其
實と得多りと謂フ一若胡亂トセハ一叙日本史と者子

一阿倍仲満、明別

唐明別ト云宋慶元府ト云明寧波ト云清是因
詳輿地志見あり方俗古より明別ト謂ハ

歸ハ寧波ト云ハ必と見てヤササケみ建ハと賦一歌あり

スハハ瞻望ト書を山ハハ音ハハ作トセハ伏トセハ

正直ト者ハケリケノ字清濁ハあ義あり章ハ濁ト從人

一すま川、南田川、書何れも同雅ナリ、ぬ各ナリ

其字伊能托行、墨多川トナリ但来前ト是、本トナリ

墨水ト名つけられハ古ト遠ク今ト異トト謂ハ

一地名、中華、及ハ次、朝鮮ト安南トの

トハ二必ハハ中華哉學ハあるナリ、豈ハハハハハハヤ

名字稀号く正しきけし玉及びひやあけし玉成除く外都て
夷言と云く

一但来翁孔子画像之賛曰是謂克肖吾豈敢是
謂不克肖吾豈敢亦唯唐帝之賜衣冕十二章儼
然王者服萬世之下萬里之外伏惟聖德遠矣哉
癸卯之夏日本國夷人物茂卿誓首拜手謹題
夷人二字番官以て如何と爲る其詳或聽まじ
一予と以て萬國と爲る人必風俗好朝鮮と琉球と
のそ其人情必疎論せし衣冠職名俗も其

儼然多美き多し殊文朝鮮先王道中華より
絶る代傳と云くハ等閑視恬淡説ハ風雅情と云
と云く

一蟠龍氏俗説各同名異人部桑原服赤都服赤同
名異人との誤りなり桑原服赤後姓成都と改む三
代実録見あり

一蟬類くつゝあり云あり源順著せし書見
あり今人につくつゝ訛云

一ふさ川と牛の角もよきよきとゆきも

一 其君と其母ゆくと賦り〜「こい〜くと云字ノ謎なり
 と云字ハ誰モ知りぬる事也 此れは今ノ假字也 其
 こい〜くと云字ハ或人ゆらこも〜とゆ上も〜
 子先りいふはゆノ字ノ上ハ云ノ字也 かくてハ辞書
 らハ云ハ云れハ意とあり決定ハ八歳ノ宣子ノ賦来
 子可吾哉 後云ハ非ハ切磋琢磨小枝といハ忽ハ
 一〜

一 史ハ婦哉つまと呼ビ婦モ又史哉つまと呼ビ日本紀
 仁賢帝ノ本紀曰弱草ノ吾夫あれハ史婦互つま

と云字誤リハ非ハ是等ハ義訓と云字とのなりつまと訓ハ
 妻ノ字限ると云ハ所謂ハ中氣象ト云字の〜て夫
 子陋和尚ノ見解と云ハ和讀ハ法ハ正訓あり義訓
 あり知〜と云ハある〜

一 世俗ノ所謂そのものつもの字ハ万葉集ノ答ノ字と
 用ゆ假名と云レハ字義ノ意ハ〜正字ハ何れと云レ
 當ノ字也水滸傳ノ該ノ字ありけりそのつと云語ハ
 俗ノ但俗語と云レハ用ヒ可し不〜雅文ハ當ノ字
 一 其つと云方諺ノ譯と云り

一見みえりみりみる非にみりとて不付所あり
ても見えりみり聞はきこえり也きく非にきくと後
ぞて不付所ありなきこえり也故見聞と對に觀は
熟トみるみり音とてくる見すとてあはしく字義通也
一聽ハ熟トきくみり秋声賦方夜讀書とて何れ
は声々西南ノ方より來々そのあるに聞へ多きは悚然ト
して之ヲ聽トす一文化者ノ聞聽との字義よくある
なり故に見聞と對せられ見聽と對せに觀聽と對せ
れた觀聞との對せに清唐人ノ俗話と學ぶ

一道家ノ書ニ神山ト云ハ蓬萊方丈瀛洲也吳邦
人始て視ること一書ニ仙境不死玉
と画像ニ吳松寫一ぬ其蓬萊唐音ハんらわ也
轉してんらとゆるハ葦原とゆるん方丈唐音ハ
ちん志カなり轉してハ丈とゆる瀛洲唐音ハ
ちんらり轉してちんらとゆるハ丈治ハ本州倭國東
女坐なりト云是也瀛洲ハ今蝦夷ト云清朝梓ハ萬
國日本國ノ東北瀛洲ト云あり今ちんらりハ必
り吳邦人始てけ三島哉見ぬらんハとく佳

境云智の園好事の情非のや北条の代記ハ丈と
始て足付一版成着子殊の外好風去、まかり故、
所ハ聞所、一版成予、臆説、非の白石先生

と言々

女園の俗云女護、多ナリ本州ノ葎草ノ條下ニミナリ葎草ハ俗ニ云ハ一ノ草ナリ此草ヲ以テ布帛ヲ染ムハ丈ニト云條布アリ或云葎草ハ一ノ草ニ非ストホタ何レカ是ナルヲ詳ニセス請本州家ニ實セヤ

一或名家の医生灸耳草と灸耳草トあやむり唱へ

一生是りて世と汲られ

一或名家の老儒教の序にて孟子序説と謙せられ

一聴ハ孔子の箇ノ仁ノ字と説玉い孟子の仁義と對

一して説れあり是孟子の孔子より賢に所ありと謙せ

られぬは僻事と言れ如何書物と讀しとや知れ

僻事と言れても誰とむの者もや一生儒者ある由の

首級列れハ其身一か幸と謂ハハ

一猶字翻譯してまゝとに於寒杯を杯ト觀つて

人此の意用ハ誤りなり

一や一の鉢ハハ鉢等ハ富士の峯甲斐の峯と略すなり

西の法師ハ小夜ハ中山にて賦ハハハ鉢とさや小ハハ

と云ハ甲斐の峯と小夜ハ中山よりと云ハハハハハハ

一 医家薬の上包せん一やうはるのどとくト書てい
てよなあ一く言もいびと一とすなひ可あらん
或人曰と一ノ一此字死音通つ故くトニスルと
此言せん一やう一ノ字志やうがノ一ノ字如何と
云ひられ聖日志やうがとせうがとすたり傍人後て
曰ま一ノ字庚耕清ノ韻なれい志やう一ノ假字勿論なり
然とせうトすれ一如何医志やうがノ志ノ死ノ字と確
なりとわくる改中字象ノ人部充満せり豈唯医
生のみならず人や

一 花ノ咲さくの字ハ用ノ字ナリ日本紀木花用耶姫コナササヤヒメ可
一 薬とさるむ野菜とさるむ一キサムハ判ノ字也世割刻
等ノ字と用カハ誤ナリ
一 東玉通鑑ノ序ノ文字ノ位置と顛倒セラル誤リナレとも
一 人未タ視スル事多ク

一 東國通鑑ハ朝鮮必ク史記ナリ順化王ノ朝
鮮と心せられ時多ク彼必クすと素来ナリ
一 中ノけキ金部あり一在世方ニて翻刻せり
其後彼必クを以て新子拾りて贈られ

一也全初五十卷あり

一吉野拾遺四卷編者名と述を南朝王人の子と
と見ゆ鶴峯文穆先生序なり坊間板行し書ハ
序ハ一櫻雲記三卷是又南朝日記なり

一摺ハ力合之涉二切折也譯してたつと読ム摺ハ他蠟都

一盞二切打也譯してすつと読ムけつと人け二字ととり

一遠て誤り用ルる久一摺ハ手翰なと六摺七摺とる

一たつより手翰式等と觀つて一摺ハ本草綱目抽し條下

一打碑と云ふ見一あり馬可と云ふむおれい一すま

石搨と書ハま當ひる石摺と書ハ誤なり

此摺ハるるハ加板ヲカヤウトヨム早卒改ル可く世間

岑亨
使字

事敏系キ知て改め用るも七なり行岑ヲ行本

誤ルハ合点して左法とあるもあれ右搨摺と二字

一乃木ノ字と云ふと讀ハ誤りなり條ハまごもあつた

元本マハも非ハけつし人花一輪二輪なと云ふ華人

花一乃木ト云ふハ長崎譯官サカキ彭城氏ハ話ハ聞リ

一和歌ノ詞書と云ふ序杯とハ唱ふ一ハ詞書と云

一 一或名取人床掛物古筆和歌あり其詞
才成前まよと云て座中し人子笑れぬ

一 倭漢三才圖會倭字成これ心悪し何和字成
くれぬや中華人北狄と罵て羌奴と唱我必し人
と弄て倭奴と唱羌ハケモノ也是對せる倭奴より但来
翁と譯答和ノ字と用ゆと説く處皇和と用
發明し自賛あり此れ古倭ノ字ノ惡しきと云ふ鶴山
野義卿名ハ節矣人見
表ノ字ハ友元但来翁と云て發明せられぬり皇
和と用ゆる仁齋先生も自筆ノ写本に逐一皇和と云

名節族人見

れあると堀川ノ水哉圖て視りハ豈但来と云ふも非
中や師匠と云ひる學者ハ如し事成知るもこれぬと云
ハ流と師匠と云ひる不可なる事と知んぬ

東海先生名維章姓平族篠崎字子文
表字金吾林祭酒門

東海談下篇畢

